

ポートランド日本庭園 カルチュラル・ヴィレッジ

設計 隈研吾建築都市設計事務所

施工 Hoffman Construction Company

所在地 アメリカ合衆国オレゴン州ポートランド

PORTLAND JAPANESE GARDEN CULTURAL VILLAGE

Architects: KENGO KUMA AND ASSOCIATES

駐車場とカルチュラル・ヴィレッジを結ぶ遊歩道から見る。左にティーカフェ、右にカルチュラルセンターが見える。ポートランド日本庭園は、市中心部のほど近くに位置するフシントンパーク内に1967年に設立された。日本文化発信のミュージアム機能でも知られる同園を、コミュニティの文化的な核とすべくカルチュラルセンター、ガーデンハウス、ティーカフェで構成されたカルチュラル・ヴィレッジと、駐車場に隣接するチケットパビリオンが新設された。



カルチュラルセンターのリビングルームからヴィレッジコートヤードを見る。この建物のコートヤードにシグザグ型に面した外壁はすべて引戸になっており、開放することができる。右奥がガーデンハウス。



コートヤードからカルチュラルセンターを見る。1階の屋根は、手仕事で仕上げたシボ(タン)の印刷が施されたアルミパネル。2階の屋根は染色工場から副産物として発生する余剰バイオマススクイからつくられた超微多孔発泡ポリマックス基盤を利用した緑化屋根。



カルチュラルセンター内観。リビングルームからホールへ越して1階のギャラリーと2階のラウンジを見る。

都市と自然を繋ぐ建築

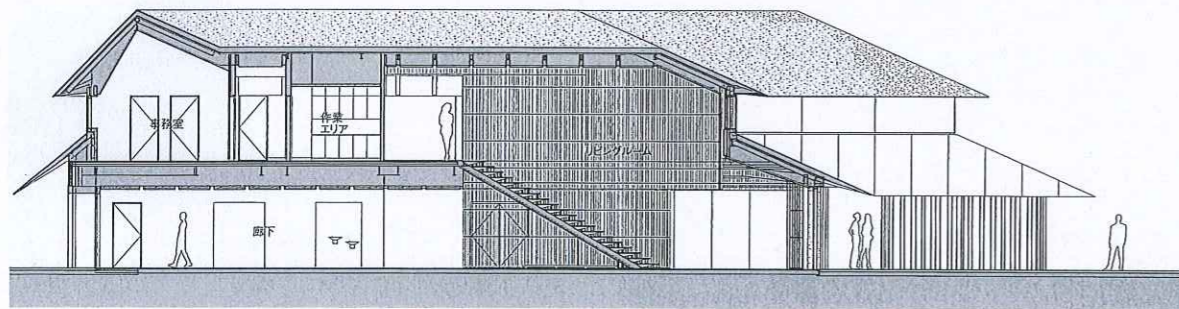
ジェイン・ジェイコブスの「アメリカ大都市の死と生」(1961年)は、モータリゼーションに依存した従来型のアメリカ大都市の荒廃を批判し、コンパクトシティとサステナビリティを指向する今日のアーバンデザインの筋道を付けた。街路のヒューマンスケールと森、川などの自然との近さで知られるオレゴン州ポートランドは、コンパクトシティのベンチマークとして、現在、世界から注目を集め、「アメリカでもっとも住みたい都市」のトップにランキングされている。1967年開園の日本庭園を、より市民に近付け、よ

り市民から愛される施設とする目的で、今回の建築はスタートした。庭園と生活とのインターフェースとなる交流、教育プログラムを桂離宮に代表される雁行プランで配置し、中央にはギザギザとした格子のファサードで囲まれる「村の広場」をつかって、ポートランドらしい小ささと暖かさを獲得した。内、外を仕切るガラスの建具はスライド式とし、広場と室内とはさまざまな関係性で繋がる。染色材料のリサイクルで生まれたポーラスなセラミックパネルを基材とする2階屋根の緑化と、既存地形に建物の端部を埋め込む特殊な断面計画によって、「村」はオレゴンの森へとスムーズに接続

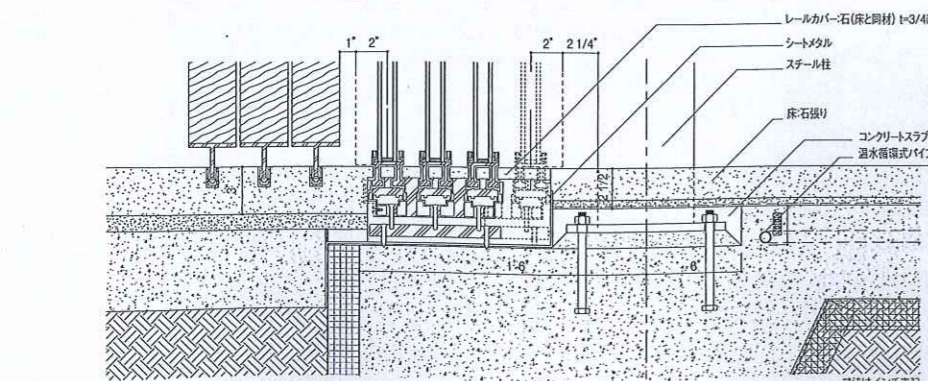
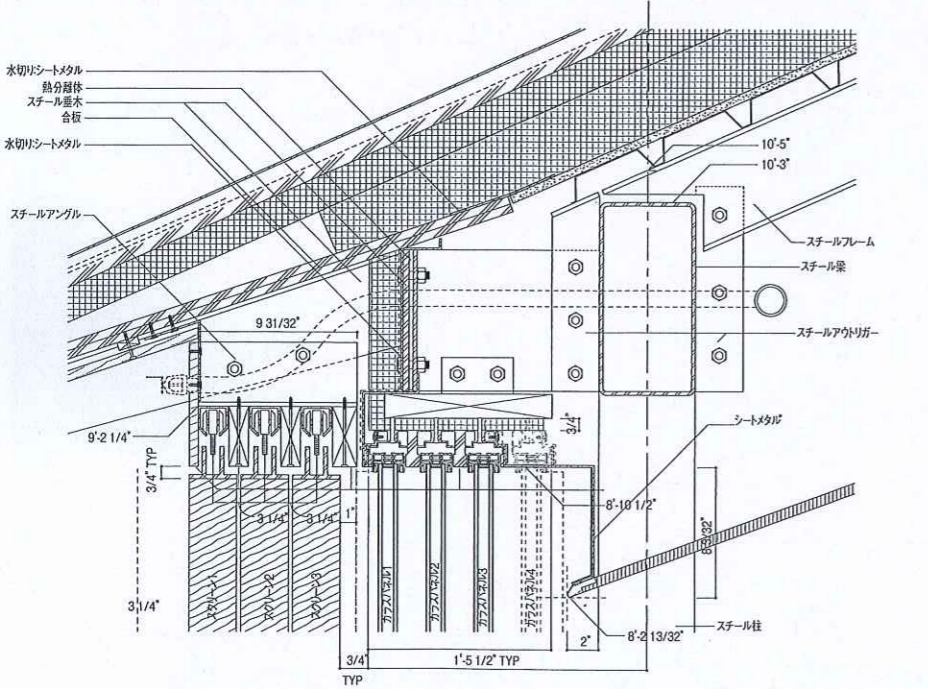
された。市民と都市と自然は、「村」によって、より緊密に繋がった。木材は地元産にこだわり、木の加工も地元の職人の手で行われた。庭園は日本で生まれ、現地に住む内山貞文氏、石積みは日本からチームを組んで参加した500年の歴史を持つ穴太衆、そして地元の庭師が共働して、さまざまなかたちでの日米のコラボレーションが、工事現場を、交流と創発の場へと変えた。庭というものが多様性を受け入れ、繋ぐ「器」であることを再確認した。(隈研吾)



左：カルチュラルセンターの階段は螺旋状の座席としても利用される。建物の内外装にはオレゴン州産のベイヒヤホワイトオークが使われている。天井はタケのパネル仕上げ。
右：ティーカフェ内観。天井はアラスカヒノキを大和張りで仕上げている。



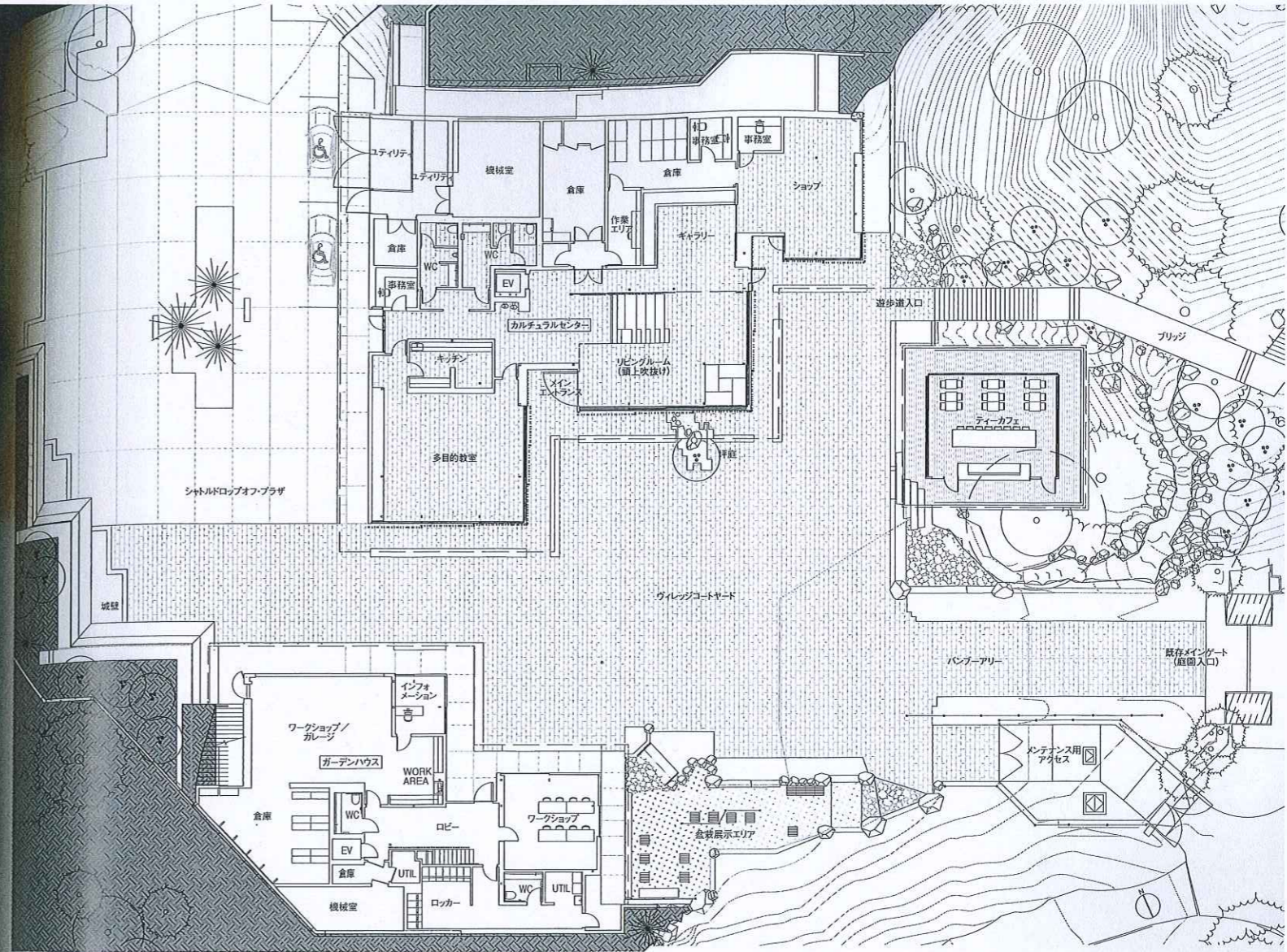
カルチュラルセンター断面 縮尺1/250



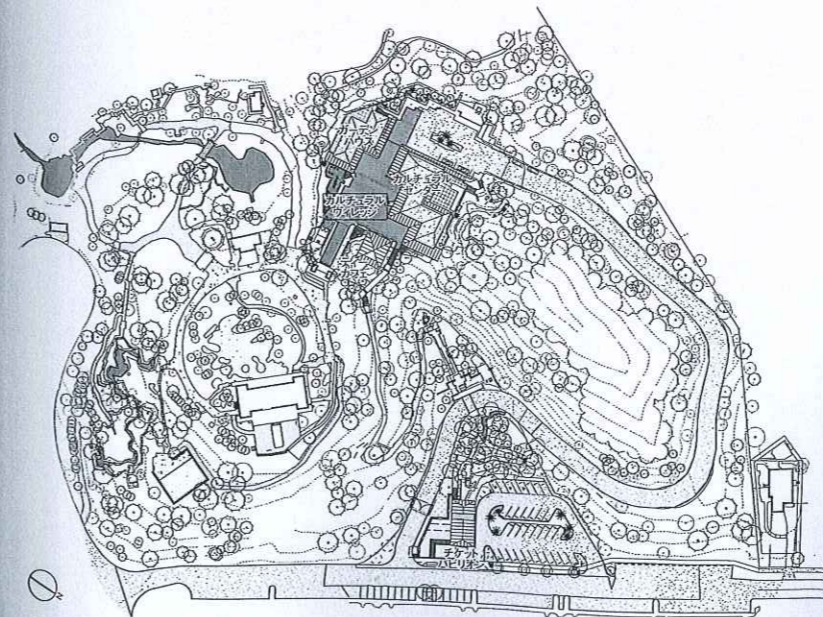
カルチュラルセンター断面詳細 縮尺1/12

設計 建築 隈研吾建築都市設計事務所
現地設計協力 Hacker Architects
構造 KPFF Consulting Engineers
施工 Hoffman Construction Company
敷地面積 庭園全体：3.7ha
本計画：1.4ha
建築面積 949.2m²
延床面積 1,431.9m²
階数 カルチュラルセンター、ガーデンハウス：地上2階
ティーカフェ、チケットパビリオン：地上1階
構造 鉄骨造
工期 2015年8月～2017年5月
撮影 Jeremy Bittermann
(データシート205頁)

カルチュラルセンターの軒下近景。内外の床レベルを面で揃えている。



1階平面 縮尺1/400



配置 縮尺1/3,000

ティーカフェ脇の遊歩道。

